

問題は次のページから始まります。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

文章「A」

山奥で道に迷い途方にくれた都会のハンターたちは、そこに現れた「西洋料理店 山猫軒」という看板のある家に入る。「注文の多い料理店ですからそこはご承知ください」という注意書きを、二人は、はやっている店なので注文が多く、料理が出てくるまで時間がかかる、ということだと思ひこむ。次から次に現れる扉の上の指示にひとつずつ従っていくうちに、二人はやがて、最後の、「からだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください」というのを読んで、ようやく、「どうもおかしいぜ」と気づき始める。そして、注意書きはすべて二人を料理して食べるための下準備であり、そのために山猫たちがつけた「注文」だったのだ、と知る。

あまりの恐ろしさにガタガタと震え、泣き出した二人の顔は紙くずみたいにしわくちゃに。

結局、二人は①あわやというところで猟犬や本物の猟師に命を助けられて、東京に帰る。しかし一度しわだらけになった顔は、もうそれっきり元には戻らなかった、というお話。

何度読んでも、ゾクツとさせられる。「西洋料理店」とは、「客に西洋料理を食べさせる店」ではなく、「客を西洋料理にして食べる店」だったわけだ。その意味では、「西洋料理店」という看板に偽りがあったわけではないし、「注文が多い」というただし書きにしても、それ自体は嘘ではなかった。

二人の解釈が間違っていたのだが、たぶん他の人だって同じように考えただろう。そこが怖いところだ。狩猟と言えば、人間が動物を殺すことであり、料理と言えば人間が他の生きもの

を料理することであり、注文と言えば、人間が自然界に対してつけるものと、ぼくたちは考える。そして、もしかしたら、その逆がありうるかもしれない、と②想像してみることはまずない。

人間↓動物、人間↓人間以外の生きもの、人間↓自然界。こんなふうな、いつだって、矢印は人間から他のものへと、一方に向いている。働きかける側（主体）はいつも人間で、相手はいつも働きかけを受ける側（客体）だ。矢印が逆を向く可能性に、ぼくたちがなかなか気づかないとすれば、それはなぜなのだろう？

それは、「人間」と「他のもの」の間に、暗黙のうちに上下関係が想定されているからだろう。矢印が上から下へと向いているのは、水が上から下へと流れるのと同じように、当たり前なことだ、とぼくたちは思いこんでいるようだ。

狩猟に関する※賢治の話に、「氷河鼠の毛皮」がある。

厚い毛皮の防寒具をまとった乗客たちが、イーハトヴ発「最大急行ベアリング行」で旅行中、仮面やマフラーで素顔をかくした白熊などの野生動物たちの襲撃を受ける、という物語だ。襲撃者たちのねらいは乗客の一人、大富豪のタイチ。彼はふだんの冬の服装の上に、ラッコの毛皮を裏地にした内※外套、ビーバーの毛皮の中外套、表も裏も黒キツネの毛皮でできた外外套などを着込み、おまけに上着は、四百五十四分の氷河鼠の首の部分の毛皮だけでつくられている。今回列車に乗ったのは、「黒キツネの毛皮九百枚をもち帰ってきてみせる」という賭けをしてしまったからだという。自分の富をひけらかし、酒を飲んで他の乗客にからむタイチのまるで「馬鹿げた大きな子供の酔いどれ」みたいな態度に、みんな、腹をたてたり、呆れたりしていたのだった。

告発を受けたタイチが襲撃者によって外へとまさに連れ出されようとするとき、乗客の船乗りらしい青年が襲撃者の一人からピストルを奪い、逆に人質にとつて、その仲間たちをこう叫ぶ。

おい、熊ども。きさまらのしたことは尤もだ。けれどもなおれたちだつて仕方ない。生きていにはきものも着なけあいけないんだ。おまえたちが魚をとるようなもんだぜ。けれどもあんまり無法なことはこれから気を付けるように云うから今度はゆるしてくれ。

最後はあつけない。タイチと人質は解放され、襲撃者たちはみな降りて、列車はまた動き出す。「今度はゆるしてくれ」という船乗りの青年の要求があつさり受け入れられたのは、なぜか。それは青年の言葉が、**③** 相手にとつて説得性をもつていたからだろう。このことについて考えてみよう。

作者の賢治は、まず青年の言葉を通じて、「きさまらのしたことは尤もだ」と、襲撃者たちの動機を肯定してみせる。だが同時に、人間が毛皮をとるのは、熊が魚をとつて食べるのと同じように、生きものとして「仕方ない」ことだと言う。その上で青年は、「あんまり無法なこと」をこれからはしないようにすると言う。ある程度はしかたがないが、あまりひどいことはつしむ、というわけだ。それは青年が自分のことを言っているようでもあり、タイチの代わりに言っているようでもある。またそれは、人間を代表して言っているようにも聞こえる。

つまり、人間として、生きていくために必要な範囲を、大きく越えるようなことはしないようにする。もっと言えば、生きものの世界に本来あるべき「法」に背かないように生きるよう

にする、ということだろう。そうすることで、人間と動物との間になるべくフェアで、公正な関係をつくり、保つていかなければならない。これこそが、狩猟社会をはじめとする多くの伝統社会が、神話や伝説や昔話を通じて伝えてきたメッセージでもある。

「氷河鼠の毛皮」をとりあげて、人類学者の中沢新一が「**④** 圧倒的な非対称」と題する文章を書いたことがある。そこで中沢は、あの物語の中の野生動物たちによる襲撃を、人間たちに対する一種の「**※**テロ」として見る。彼によると、作者の賢治は、こうした「テロ」を引き起こす原因として、人間界が野生動物に強いてきた極端な不公平——それを中沢は「圧倒的な非対称」と呼ぶ——があると指摘したのだ。

この文章を中沢が書いたのは、二〇〇一年のニューヨーク同時多発テロとそれに続く対テロ戦争、そして**※** 狂牛病によって世界中に不安が渦巻いていた時のこと。中沢が言うには、テロも狂牛病も同じ原因から生まれる。**I**、どちらも「圧倒的な非対称」が生み出した病気なのだ、と。

現代世界は「貧しい世界」と「富んだ世界」に、弱者と強者に、敗者と勝者に引き裂かれ、その富と力の格差はますます大きく、圧倒的なものになりつつある。またこれと並んで、人間界と動物界の間も、これまで保たれていたはずの微妙なバランスが崩れて、「支配・被支配」の関係が、ますます一方的で、暴力的で、無慈悲なものとなつている。

中沢によると、世界を荒廃に導くこのふたつの「圧倒的な非対称」は偶然生まれたわけではない。どちらも現代文明にもともとそなわっている性質が表れたもので、互いに切つても切れない関係にある。

II

と彼は言う。かつて、人間界と動物界の間の格差や

不公正が大きくなりすぎないようにしてきた社会——それを対称性社会と呼ぶ——が世界中あちこちにあつたし、今もまだわずかに残っている。そこに注目しよう。そして、「対称性社会の住人ならば、これをどんなふうにも思考して解決に導こうとするのだろうか」と考えてみる」ことだ、と。

「対称性」という言葉で思い出すのは、猟師と動物のやりとりを描いた賢治の作品「なめとこ山の熊」だ。少し長くなるが、あらずじを書き出したい。

熊とり名人の小十郎は、原生の森をのし歩いては、熊を撃ち、その毛皮と胆のう（それを干した「くまのい」は漢方薬として珍重される）をとって、生計をたてていた。そんな彼に、しかし、なぜか、なめとこ山周辺の熊たちは好感をもっているのだと、語り手（賢治）は言う。そして小十郎の方でも、「もう熊のことばだつてわかるような気がした」と。

例えば小十郎は、撃ち殺したばかりの熊のそばに寄つてきてこう言う。

「熊、おれは※てまえを憎くて殺したのでねえんだぞ」

そして、本当は他の仕事をしたいのだが、農業も林業もできず、しかたなく、熊とりをしているのだと語りかける。

早春のある日、熊の母子に出会つた時のこと。

「まるでその二疋の熊のからだから※後光が射すように思えてまるで釘付けになつたように立ちどまってそつちを見つめていた」

そして、しばらく熊の母子の会話に耳を傾けた後、小十郎は「音をたてないようにこつそりこつそり戻りはじめ」、結局、撃たずにすませる。

語り手は、町に毛皮とくまのいを売りにいく時に小十郎が感じるみじめさについても語る。商人たちは、危険な仕事はしな

いくせに、猟師の足もとをみて、ひどい安値で買ったたく。ある時、小十郎が熊をもう少しで撃つところで、その熊が両手をあげて叫ぶ。

「おまえは何がほしくておれを殺すんだ」

そう言われてみると、彼には熊を殺すだけのしつかりとした理由がないように思える。食べ物を買う金のために熊をとるのだが、その金がなくても、山にあるどんぐりなどを食って生きていく方がいいような気もする、そしてそれでたとえ死ぬことになつてもいいような気がする、と彼は熊にうちあける。

すると熊は、自分も死ぬのはかまわないのだが、少し残した仕事もあるので、もう二年ばかり待つてくれないか、と小十郎に頼む。

それからちようど二年目、自分の家の前で、あの時の熊が倒れているのを見て、小十郎は「思わず拝むようにした」。

最後に、小十郎は熊撃ちの最中に死ぬ。意識が遠のく中で、彼は熊の言葉を聞いた。

「おお小十郎おまえを殺すつもりはなかった。」

…そしてちらちら青い星のような光がそこら一面に見えた。

「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ。」と小十郎は思った。

それから三日目の晩のこと、凍りついた小十郎の死体のそばで、熊たちが雪の上に輪になり、ひれ伏して祈っていた。

小十郎の顔はまるで生きてるときのように冴え冴えして何か笑っているようにさえ見えたのだ。

この物語は、その前の「注文の多い料理店」「氷河鼠の毛皮」に比べてどうだろう。前のふたつが、文明と野生との間の非対称を少し大げさに※戯画化して描いていたのに対して、ここでは、小十郎と熊たちとの間に成り立っている、敵対的であると同時に親密な関係を、リアルに描いている。

前のふたつの話に出てくる、都会の紳士たちと山猫、タイチと寒い地方の動物たちとの関係は、ここでは、小十郎から毛皮などを買う商人と熊たちとの関係にあたる。その間に立っているのが小十郎だ。

そう言えば、小十郎と商人とがやり合う場面で、語り手の賢治はこう言っていた。

日本では……狐は猟師に負け、猟師は旦那に負けるときま
っている。ここでは熊は小十郎にやられ小十郎が旦那にや
られる。旦那は町みんなの中にいるからなかなか熊に食
われない。

ここで「旦那」と呼ばれる町の商人は、最後に熊にも「やられる」小十郎と対比されている。小十郎が、「やつたり、やつれたり」という連鎖の中にあるのに対して、商人だけは「食われない」、そして「負けない」。それはまるで、すべての生きものたちが「食べたり、食べられたり」という関係でつながっている※「食物連鎖」の輪の中から、人間だけを除外している文明のあり方を象徴しているかのようだ。

金という権力をふりかざす商人が、小十郎に⑤ みじめな思いをさせる場面を描くのは、「実にしゃくにさわってたまらない」と、書き手としての賢治はぼやいている。Ⅲ、「こんないやなずるいやつら」は、世界がだんだん進歩していけば、ひと

りでに消えてなくなっていくにちがいない、とつぶやいて自分をなぐさめる。

それから百年後、「こんないやなずるいやつら」は消えてなくなるどころか、ますます世界に増え続けているのではないか。そして、強い者はますます強く、弱い者はますます弱くなっているようにぼくには見えるのだが、この様子を賢治が見たらなんて言うだろう!?

それはともかく、この物語の肝心なところは、小十郎のその「みじめさ」であり、「かなしさ」だ。熊を殺す立場にある小十郎だが、彼が生きていたのは、熊たちにごく近い場所。彼もまた中沢の言う「対称性社会の住人」なのだ。

小十郎と熊たちは互いの「弱さ」を通じて、コミュニケーションをはかり、理解し合い、つながる。そして彼らはともに、商人に代表される「強さ」の都市文明から遠く隔てられている。

(辻信一 『弱虫でいいんだよ』 一部改変)

※(文中のことばの意味)

賢治 …… 宮沢賢治のこと。

外套 …… 寒さや雨を防ぐために、洋服の上に着るもの。

テロ …… 政治的な目的を成しとげるためには、人の命をうばうような暴力を使ってもよいとする考えのもと起こす事件。

こす事件。

狂牛病 …… 牛の脳に異常をきたす病気。

てまえ …… 相手を指している。おまえ。

後光 …… 仏の体の後ろに出るといわれる光。

戯画化 …… こっけいにえがき出すこと。

食物連鎖 …… 自然界における食うものと食われるものとい

う、生物どうしの、ひとつながりの関係。

文章「B」

弱い者は死ぬ、強い者は生き残る。これが本来の野生動物の世界です。

そして、人間も、もともとは※生態系のピラミッドの中にいる、野生動物の一員にすぎなかった。野生動物としての人間は、いかにもひよわで頼りない存在です。IVの世界においては、きつと、クマにやられる人もいたでしょうし、トラにやられる人もいたでしょう。でもそれが日常的だったのは、はるか昔のことです。

子ども向けの絵本だと、よく生態系のピラミッドのてっぺんに人間が堂々と描かれていたりしますが、私はあの絵は、まちがっていると思うんですよ。

ピラミッドのてっぺんどころか、もはやピラミッドから大きく外れてしまつて、ピラミッドを丸ごと※足蹴にして全部ぶつ壊すことができるくらい、人類は文明という強大な力を持つ「神」になつてしまつている。それなのに自分たちがなにをしかかしているのかに気づきもせず、自覚もないまま、際限なく破壊を繰り返している。

それが人類という種だと思います。

やろうと思えば、きつと一か月以内で野生動物たちが暮らしている森を全部、あとかたもなく切り尽くすことだってできるでしょう。生態系のピラミッドの中に、こんな身勝手に※制御不能な種が、いまだかつていたでしょうか。

(上橋菜穂子 齋藤慶輔

『命の意味 命のしるし』 一部改変)

※(文中のことばの意味)

生態系 …… ある地域に生きているすべての生物と、それを

取り囲む環境とを一体としてとらえたもの。

足蹴 …… ひどい仕打ちであることのたとえ。

制御 …… 思い通りにおさえあやつること。コントロール。

問1 ⅠⅢにあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア しかし イ そもそも ウ たとえば
エ そして オ つまり

問2 線①「あわや」について、正しい使い方をしているものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア このチームが、あわや全国大会に出場するなんて考えてもいなかった。
イ 母の運転する車が、あわや交通事故をひき起こすところであった。
ウ 僕の打ったボールは、あわやホームランになるかと思うくらい飛んだ。
エ 連日の大雨によって川が増水し、あわや大洪水だいこうずいになってしまった。

問3 線②「想像してみることはまづない」とありますが、なぜですか。その理由を三十五字でぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

問4 線③「相手にとって説得性をもっていた」とありますが、どのような点が「説得性」をもっていると筆者は考えていますか。五十字程度で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問5 線④「圧倒的な非対称」あつどうてきについて次の問いに答えなさい。

(1) 「非対称」をいいかえた表現を文中から二つ、それぞれ六字でぬき出しなさい。

(2) 「圧倒的な非対称」を改善していくためにはどうすることが必要ですか。文中の言葉を使って、四十字以上五十字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問6 線⑤「みじめな思い」とありますが、「みじめな思い」をするのはなぜですか。三十字以上四十字以内で答えなさい。句読点なども字数に数えます。

問題は次のページにつづきます。

問7 宮沢賢治の作品について平山さんと安田さんが話し合っています。(a) (b) (c) (d) にあてはまることばを、指定された字数で文章「A」からぬき出しなさい。

平山 文章「A」では、宮沢賢治の作品が登場するね。

安田 賢治は、人間とそれ以外のものとの間の不公平さに疑問を感じていたようね。

平山 確かに、人間が上という考え方によって環境が汚染されたり、(a) (b) (c) (d) たちが絶滅に追いやられたりしていることもあるね。『氷河鼠の毛皮』には、まさにそんなメッセージがふくまれているようにも感じるね。

安田 そうね。あと、文章「B」を読んでみて、あらためて『注文の多い料理店』には、本来人間も (b) (c) (d) (四字) の中の一部であることを、忘れてはいけないという忠告がこめられているのだと感じたわ。人間は「神」ではなく、生物ですものね。

平山 うん、そうだね。生物としての人間は、かつては他の (a) (b) (c) (d) (四字) かつ (c) (三字) かつ (d) (二字) な関係でもあったことが『なめとこ山の熊』には描かれていたんだね。

安田 それが生物としての、人間の本来の姿であり、今の私たちは、そこに出てくる商人とあまりかわらないのかもしれないわね。

問9 文章「A」と文章「B」から読み取れることと、それに対するあなたの考えを、次の条件を満たした文章で書きなさい。

条件 … ア 百八十～二百字で書くこと。

イ 二段構成で書くこと。

ウ 一段落目には、文章「A」と文章「B」から読み取れることを、「自然」と「文明」という言葉を用いて書くこと。

二段落目には、第一段落で書いたことをふまえて、私たちがどうしていくべきかを書くこと。

問8

IV

にあてはまる四字熟語を答えなさい。

これで問題は終わります。

